

『国際学部紀要』 刊行にあたって

国際学部長 佐道明広

『国際学部紀要』創刊号が刊行されるにあたり、ご挨拶させていただくことを大変光栄に思います。国際学部は2020年4月に創設された、中京大学で最も新しい学部です。2学科6専攻で構成され、人文社会科学の多様な専門分野を対象とする研究者が所属しており、『国際学部紀要』はその研究成果を発表する場となります。

今、二つの意味で時代の転換点にあると言われています。一つは、Society 5.0と言われる新しい社会への転換です。Society 5.0とは狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続くもので、わが国が目指すべき未来社会の姿として唱えられているものです。それは「サイバー空間 (仮想空間) とフィジカル空間 (現実空間) を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」(内閣府)と説明されていますが、IoT、ロボット、人工知能 (AI)、ビッグデータといった先端技術を利用して形成されるもので、具体的にどのような社会なのか、どうすれば実現できるのか、検討すべき課題も多くあります。

二つ目は、現在が20世紀の世界恐慌 (1929年) から世界大戦に至った1930年代と同様の時代の転換期に立っているという認識です。30年代は、恐慌への対応として各国が自国本位の政策を展開し、ナショナリズムの高揚と社会不安の増大の中でファシズム・軍国主義などの権威主義体制が成立して戦争へと突き進みました。現在は、冷戦終了後のグローバル化進展の中で各国間および各国内での格差が拡大し、それに宗教対立・民族対立などが複雑に関係して国際的な不安定性が高まっていました。そうした状態でコロナ禍を迎えたわけです。危機への対応の中で、自由主義、民主主義を普遍的価値として重視してきたアメリカやヨーロッパでも、政治体制に大きな不満を持つ人々が増大し、自由主義・民主主義が問い直される中で、世界は権威主義体制と自由・民主主義体制の二つに分裂していく恐れがあるとも言われています。

いずれにしても、社会が不安定となり、将来の不透明さが増している現在、人間そして社会や文化に関する深い洞察は極めて重要であり、それらを学際的に検討していく必要性が増大していることは言うまでもありません。人文社会科学の様々な分野の研究者が、その研究成果を発表する『国際学部紀要』が、現在の、そして新しい時代や社会を読み解いていくためのフォーラムとして成長していくことを期待しています。